群教セ	G01 － 03
	令 2.275 集
	国語－中

言語感覚を磨きながら、考えを広げ、深めることのできる生徒の育成

――考えを可視化するための「分析シート」の活用を通して――

特別研修員　南雲　香織

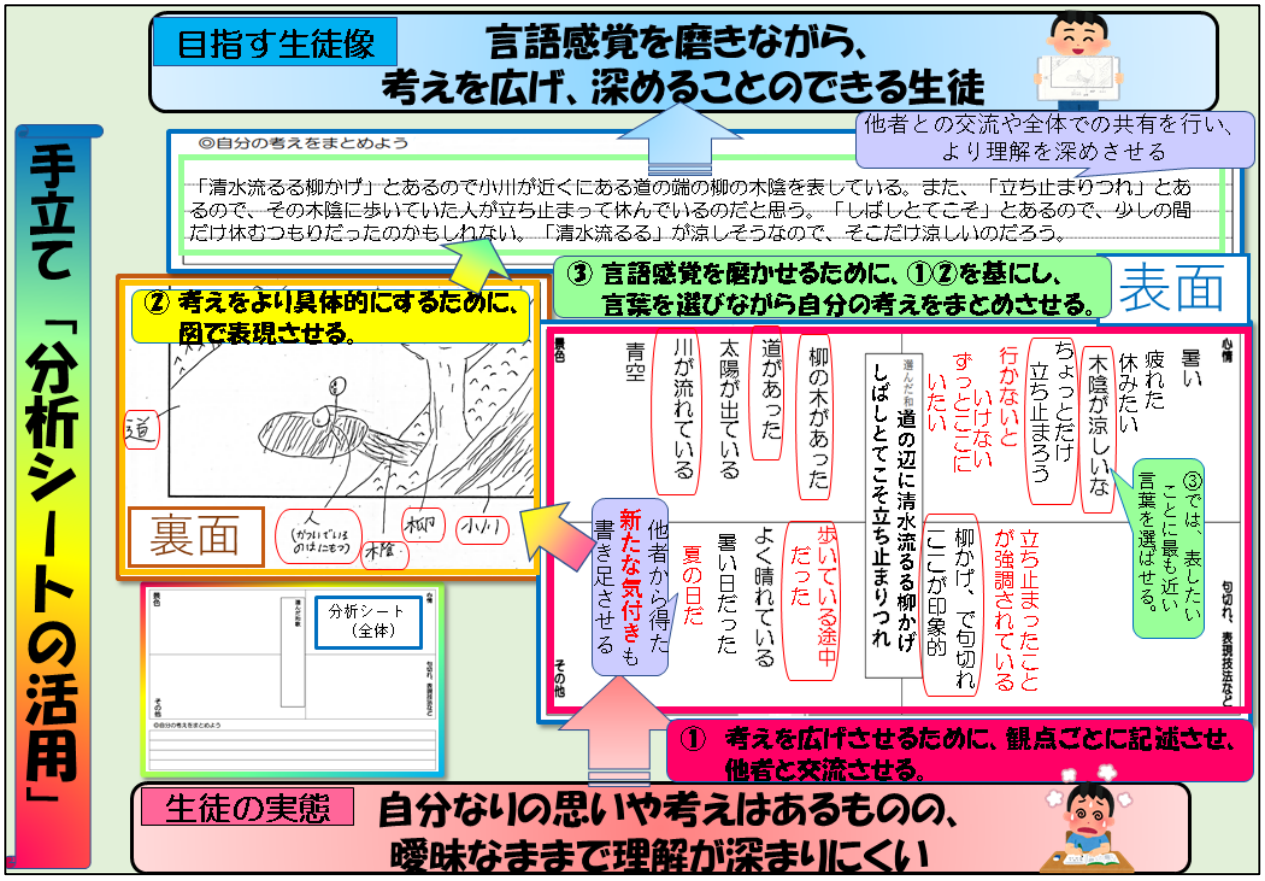
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

国語科の目標には、「（２）論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする」とある。

研究協力校の生徒は、文章から読み取った筆者の考えなどについて、漠然としたものではあるものの、自分なりの考えや思いをもつことができる。しかし、その考えや思いは具体的とは言えず曖昧なままなので、理解が深まりにくいという実態がある。このような実態は、多様な意味をもつ若者言葉の広がりに伴う語彙力の低下や、ＳＮＳ等の普及により短い言葉でのやりとりの機会が増えたことに起因するものと考えられる。そこで、新学習指導要領で求められている「言葉を通じて人や社会と関わり自他の存在について理解を深める」ことにつながるよう、言葉のもつ意味や文章の中でのその言葉のもつ意味合いや味わいを感じつつ、どのようなことを自分が考えたのか、可視化させることで、自分の考えを明確にさせていくことが重要と考えた。さらに、文章の中の言葉の意味やその文章の中での役割を考えながら、自分の考えを広げ、深めることを目標とし、上記のテーマを設定し、以下の手立てを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

読み取ったことを可視化するために、「分析シート」の活用を以下のように行った。

手立て　分析シートの活用

①　観点ごとの記述

生徒の読み取りの手助けとなるような観点を提示し、その観点ごとに読み取ったことを書き込ませる。書き込ませることで、生徒は、自分がどのようなことを読み取ったのか、どれだけのことを考えることができたか、視覚的に確認することができる。思い付く限り書き出したり、他の生徒と交流したりすることで新たな気付きを得ることができ、より考えを広げさせることができる。

②　図での表現

①で得た考えをより具体的にするために、図で表現させる。言葉で表しにくいことを一度図で表すことによって、具体的にイメージをもたせることができるようになる。

③　自分の考えの記述

①で記述した言葉を選び取りながら、②で広がったイメージを基に、読み取ったことを文章にして表現させる。自分の言い表したいことに最も近い言葉を取捨選択することを通して、言語感覚を磨きながら、自分の考えをまとめさせることができる。モデル文を示すことで生徒を支援していく。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　観点ごとの記述をする場面では、自分で考えるだけでなく、他者との意見交流を通して新たな気付きを得たり、学んだりすることができていた。生徒の実感の中には、「言葉を書き足していくうちに、初めはよく分からなかった様子が分かるようになってきた」「他の人の意見を聞いて、想像が広がっていった」など、自分の読みが膨らんだことを感じた様子が見受けられた。観点ごとに記述する活動は、生徒が自分の考えをもち、それを広げることに有効であったと考えられる。

○　読み取ったことや感じたことをまとめる前に一度図で表すことで、生徒一人一人がそれぞれのイメージをもつことができた。絵の上手・下手に拘らず様子が分かるような図にする、という声掛けを行ってきたことが奏功したと考えられる。さらに、図に表してから文章にすることで、よりイメージの広がりをもたせることができた。

○　自分の考えをまとめる際には、観点ごとに分析する活動で得た言葉を活用し、図で表現することで広げたイメージを基に、読み取ったことやそこから自分が考えたことなどを書くことができた。観点ごとの記述の中で得た言葉を全て使うのではなく、得た言葉の中から選んで考えを書く姿から、自分の考えに合った言葉を選んでいる様子も見取ることができた。

○　自分の考えをまとめた後に、お互いに図を見せながら考えを交流したり、全体で共有したりすることを通して、「より理解が深まった」という実感をもたせることができた。

２　課題

○　観点ごとに記述する場面では、一つ一つの言葉から想像することができたものの、「この言葉についてはこうだ」というような単純な理解になってしまい、一つながりの文章の中での、その語の役割を考えていく読みが薄くなってしまう部分もあった。文章全体を通して、更に考えに広がりや深まりをもたせることができるとよかった。

○　図での表現は、多くの生徒は難しさを感じず取り組むことができたが、絵に強く苦手意識を感じる数名の生徒は鉛筆を動かせなかった。また、内容によっては図に表しにくいものがあることも課題として挙げられる。

○　自分の考えをまとめる場面で提示したモデル文は、助けられる生徒もいれば、必要のない生徒もいる。必要のない生徒にとっては、思考の幅を狭めてしまう結果となってしまう。手助けの要る生徒、そうでない生徒への配慮も必要であると感じた。

実践例

１　単元名　「君待つと―万葉・古今・新古今」（第３学年・２学期）

２　本単元について

本単元では、三大和歌集である万葉集・古今和歌集・新古今和歌集から和歌を数首ずつ学ぶ。それぞれの和歌の成立した時代の歴史背景やそれぞれの和歌集による違い、表現上の特徴などにも気を付けながら読み取っていく。その中で、当時の歌人たちがどのような考えをもっていたのか、どのような景色を見て、どのような思いを抱えてその和歌を詠んだのか、現代に生きる自分たちと比べながら読むことが期待される。

１学期の学習の中で、俳句を読む際に季語や季節だけでなく、表現技法による効果も考えながら俳句に詠まれた情景を考える活動を行った。本単元においても、表現の特徴から、詠んだ歌人が強調したかった思い、歌の中から想像できる景色を、想像を膨らませながら読み取ることができるようにしていきたい。

以上のような考えから、以下のような指導計画を構想し、実践をした。

目標	「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」を読み、「分析シート」を用いて和歌に表された心情や情景を想像する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 (1) 歴史的背景やそれぞれの和歌の特徴を捉えながら読むことで、和歌の世界に親しむことができる。 （知識及び技能） (2) 和歌に表れた心情や情景などについて自分の考えをもち、互いに交流することで、理解を深めることができる。 （思考力、判断力、表現力等） (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。 （学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1) 三大和歌集の代表的な和歌について、歴史的背景やそれぞれの和歌の特徴を捉えながら読んでいる。 【知識・技能（３）我が国の言語文化に関する事項ア】 (2) 読むことにおいて、和歌に表れた心情や情景などについて自分の考えをもち、互いに交流することで、理解を深めている。 【思考・判断・表現Ｃ読むエ】 (3) 粘り強く和歌に現れた情景や心情を読み取ろうとしながら、学習の見通しをもって、「分析シート」に取り組んでいる。 【主体的に学習に取り組む態度】

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・三つの和歌集の成立の時代や作者を確認し、基礎的な知識を得た上で音読をすることで、それぞれの歌集の特徴や歌風を感じる。
追究する	第２時	・「万葉集」の和歌を読み、どのような情景が表現されているか想像する。
	第３時	・「古今和歌集」「新古今和歌集」の和歌を読み、「分析シート」を用いて、表現された情景について想像を広げ、和歌についての自分の考えをまとめる。
まとめる	第４時	・和歌に描かれた情景について考えた「分析シート」を用いて交流し、それぞれの和歌への理解をより深める。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全４時間計画の第３時に当たる。本時のねらいは、「『古今和歌集』『新古今和歌集』の和歌を読み、和歌に表現された心情や情景を想像する」ことである。これらを達成するための手立ては、以下のとおりである。

手立て　分析シートの活用

①　観点ごとの記述

「心情」「景色」「句切れ・表現技法など」「その他」の四つの観点で、気が付いたことを記述させる。

②　図での表現

どのような情景の描かれた和歌なのか具体的にイメージをもたせるために、図で表現させる。

③　自分の考えの記述

①で集めた言葉を用い、②で得たイメージを基に、どの言葉からどのような思い・情景が読み取れたかを、生徒自身の言葉でまとめさせる。

４　授業の実際

⑴　前時まで

生徒たちは、単元の第１時で和歌集の成立時代や歌風、主な歌人などの基礎的な知識を得ている。第２時では、「万葉集」の和歌に詠まれた心情や情景について学習した。表現技法や係り結びによって強調されている言葉、そこから読み取れる思いなどを、指導者とのやり取りの中で見付けていった。その後、読み取ったことを図で表現し、どのような心情、情景が表現された和歌であったかを文章にまとめた。次時には自分たちの力で「古今和歌集」と「新古今和歌集」の和歌に詠まれた心情や情景を読み取ることを確認した。

⑵　導入

本時では、前回の「万葉集」で学習したことを生かしながら、「古今和歌集」と「新古今和歌集」の和歌六首からそれぞれの和歌に詠まれた心情や情景を、自分たちの力で読み取る活動となることを確認した。表現技法等が書き込まれた教科書を音読することでどのような特徴があったか振り返り、その後、六人班の中で一人一人がどの和歌を担当するか話し合い、担当することになった和歌について、「分析シート」を用いて考えることと自分がその和歌について読み取ったことは、班の中でお互いに共有することを確認した。

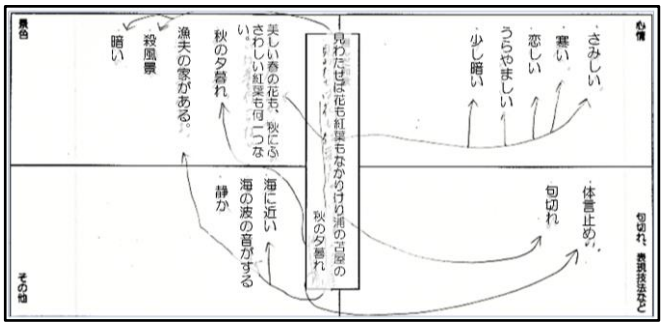


図１　観点ごとの記述

⑶　展開

一人一人が「分析シート」を使用し、「心情」「景色」「句切れ、表現技法など」「その他」の四つの観点で、気が付いたことを記述していった。和歌の中のどの言葉からどのようなことが読み取れるのか、図１のように矢印で示しながら言葉を書き出していった。次に、各班にいる自分と同じ和歌を選んだ生徒たちとの交流を行った。そこでは、図２のように自分たちが気が付いたことの共有を行わせた。それ

交流中の生徒の発言

Ｓ１：「なかりけり」で句切れているから、何もないことが強調されているようだ。

Ｓ２：何もなくて寂しい感じがするね。「浦の苫屋」だから、詠んでいる歌人は海のそばにいるんだよね。

Ｓ１：海のそばだから、波の音が聞こえてきそう。

図２　話し合いの様子

ぞれ共有が終わると、その和歌について分かることがもっとないか、読み取れることは他にはないか、この言葉はどのようなことを表しているのか、ということを更に話し合っていく様子が見られた。

共有が終わると、読み取ったことを基にして、その和歌から想像できる情景を図に表す活動を行った。観点ごとの記述で得られた言葉をヒントに、図３のように様子の分かる図を描いた。

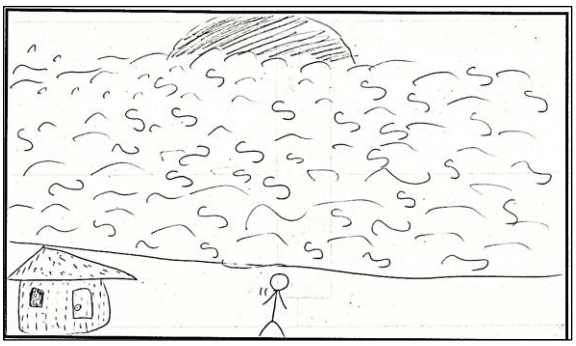


図３　読み取ったことを表現した図

観点ごとに記述して集まった言葉と、図で広げたイメージを基に、その和歌で詠まれている心情・情景についての自分の考えを文章でまとめる活動を行った。「この和歌には○○○○という言葉があるので、詠んだ歌人は○○○○という気持ちをもっている。（○○○○という景色が表されている）」といった文のモデルを示し、取り組ませた。観点ごとの記述で出てきた言葉を選び取りながら、図４のように自分が読み取ったことを生徒はまとめていった。

「花ももみじもなかりけり」とあるので、春の花も秋の紅葉もないという景色が表されている。そして、そこから寂しさや悲しさが伝わってくる。また、句切れが使ってあるので、強調されている。
「浦の苫屋」とあるので、漁夫の家があることが読み取れ、波の音が聞こえてきそう。静かで、その音しか聞こえない。

図４　自分の考えをまとめた文章

５　考察

図４のように自分の考えをまとめる際には、多くの生徒は手が止まることなく、自分がその和歌から読み取ったことを書き進めることができていた。同じ和歌を選んだ生徒と交流したことで生徒たちの「分析シート」には言葉が増えていたため、また、図で表現することでイメージが具体的になったためだと思われる。

１時間の授業を終えた生徒の振り返りの中には、「初めはよく分からなかったけれど、深く考えていくことによっていろいろ想像ができて、おもしろかった」「一つの和歌を追究していくと、自分が初めは思ってみなかったこともどんどん出てきた」という記述が見られた。また、「他の人の意見を聞くと自分が分からなかったことが分かったり、話し合っていくうちに考えが深くなっていったりした」という生徒の言葉からは、交流によって理解を深められたという実感をもたせることができたと感じられる。「どのようなことを言っているのかよく分からないまま声に出して読んだときより、分かるようになってきて読んだ方が、おもしろくなってきた」というように、本時の活動を通して、和歌に触れる楽しさも感じられるようになったと評価できる。

観点ごとに記述する活動や他の生徒との交流を通して様々な考えを可視化できたことにより、生徒は自分の言葉で表して和歌に詠まれた心情や情景を理解することができたという実感をもつことができた。しかし一方で、一語一語の言葉の意味の理解だけに留まり、その和歌の中で、その言葉がどのような効果があるのか、というところまで考えることができない生徒もいた。観点ごとに記述する場面では、自分が考えたことと他者が考えたことの追記だけに留まらず、そこから更にどのようなことが考えられるのか、というところまで生徒が考えを広げられるようにすることも必要であったと考えられる。また、図で表現した後にもう一度観点ごとの記述に立ち返ることで、イメージの広がりを言葉にして表すことも、有効であったと思われる。